2章

【問題】（演習）

出典…高村光太郎『彫刻の面白味』／早稲田大学　政治経済学部　04年

文章略解

色彩・筆致を凝らした絵画や調律・音色に訴える音楽には、表面の複雑な情調や官能に訴える快さがあるが、ただ空間を区切る線の波動があるだけの彫刻は単調の感が否めない。しかし、何の技巧もない原始的な性質だからこそ、彫刻は文明人たる現代人の心の奥と共鳴するのであり、また、自然の形を再現したものではなくその魂を抽き取って素材に込めたものだからこそ、彫刻は不思議な威力をもって人の胸に訴えかけてくるのである。

解答

問1　1＝あらかじ　2＝ぐろう　問2　イ　問3　小判

問4　ニ　問5　図々しい　問6　ハ　問7　ニ

問8　イ　問9　ハ

【問題】（演習）

出典…阿仏尼『十六夜日記』／東京女子大学　文理学部（文科系学科）00年・改題

現代語訳

*夏の間は、不思議なほど（都からの）便りも途絶えて、気掛かりなことも並み一通りではない。都の方面は、志賀〔＝琵琶湖〕のあたりで、波が立つように騒乱が起こって、比叡山〔＝延暦寺〕と三井寺〔＝園城寺〕との争いなどが噂になるにつけても、いっそう気掛かりで（不安で）ある。やっとのことで、（陰暦）八月二日になって、（待ちに待った）確かな使いを迎えることができて、（使いの者が）前々から手もとに留めておいた人々の手紙を、（私は）まとめて見ることができた。

侍従為相（ためすけ）の君のもとから、（この度）五十首の歌を、即興で詠みました、と言って、清書もろくにせず、この機会を逃すまいとして（送って）くださった。（その）歌も以前より一層大人びてきた。五十首のうち、二十八首に合点（がってん）〔＝秀歌と思われる歌の右肩に印を付けること〕を付けたが、（それも我ながら）不思議で（恥ずかしく）、親心の欲目からくる見間違いではあろうけれど（とも思えることだ）。その（歌の）中に、

A　心のみ……心だけは隔てずに（母上のそばにいるつもりで）あっても、（実際には母上は）旅姿で山路が重なる遠い白雲（の彼方にいらっしゃるのだなあ）

と（詠んで）ある歌を見ると、この（私の）旅の境遇を思いやってお詠みになったのであるに違いないのだと、（私は遙か遠くから）思いやるとしみじみとした（いじらしい）気持ちになったので、その（息子の）歌のわきに、小さい文字で、返歌を書き添えて送り返す。

B　恋ひしのぶ……（私の）恋い慕う気持ちが一緒について行くのでしょうか。朝に夕に、（旅先と都との間を）行っては帰る遠くの白雲よ

また、同じ旅の題で、侍従（為相の君）の歌に、

C　かりそめの……かりそめの（旅に出た母上の）草を枕にして野宿する（かのような寂しい）毎晩を思いやるにつけても、（私の）袖は涙で濡れることです

と（詠んで）ある所にも、また（私は）返事を書き添えた。

D　秋深き……秋深い草を枕に（虫ならぬ）私のほうこそ声をあげて泣いていることです。（都を）ふり捨てるようにして（別れて）来た（子どもたちを思いながら、ちょうど聞こえてくる）鈴虫のようにかぼそい声で

また、この（侍従為相の）五十首の歌の最後の余白に、（批評の）言葉を書き添える。およその歌の詠み様などを、ほめもし、また（今後の）歌の詠み方などをも書きつけて、最後に、亡き夫〔＝侍従為相の父、為家〕のことを、

E　これを見ば……（今は亡き夫が）この息子為相の詠んだ五十首の和歌を見たら、どんなに（喜ぶことだろう）と、思い出す亡き夫にかわって声を出して（自然と）泣けてくることです

と書き付ける。

訳注

○夏のあいだ（とくに陰暦五・六月）は暑いので、都との間を往復する人も少数であり、便りも少なくなる。

解答

問1　ア＝②　イ＝②　ウ＝①　エ＝②　問2　Ⅰ＝③　Ⅲ＝④

問3　息子が何歳になっても、親としては欲目で見てしまうことに対する、自分自身でも呆れている気持ち。〔46字・解答例〕

問4　A　都と母のいる旅先との間を隔てる（白雲）　B　旅先と息子のいる都を行き来する（白雲）

問5　「ふり」・「鈴」

問6　下されたり〔5行目〕・詠まれたるにこそはと〔8行目〕

問7 あなたの亡き父があなたの五十首歌を見たらどんなに喜ぶことかと、私は思い出す夫にかわって声をあげて泣けてくることです。

〔58字・解答例〕

問8 ③

【問題】（自習）

出典…沢木耕太郎『路上の視野』／学習院大学　法学部　95年

文章略解

「私」はシルクロードを西に向かう途中で、出会った日本人から山本周五郎の『さぶ』をもらった。街道沿いのチャイハナで一行目を読み始めた途端、「私」は不覚にも涙を流しそうになって困ってしまった。今にして思えば、それは山本周五郎の文体の力によるものだったのだろうが、一滴の雨も降らない中近東の砂漠にいた「私」にとっては、靄に煙る両国橋の描写が、いつ帰るかわからない故郷日本の鮮やかな象徴として映ったのだった。

解答

問1　①＝終局　②＝徒党　③＝街道　④＝献身　⑤＝爆発

問2　(1)＝(ウ)　(6)＝(ウ)

問3　(2)＝1　(3)＝2　(4)＝1　(5)＝2

問4　A＝(イ)　B＝(ア)　C＝(エ)　D＝(ウ)

問5　山本～の力〔41行目〕

問6　戻れないの～ていた日本〔18字・46～47行目〕

問7　(ア)＝×　(イ)＝×　(ウ)＝○　(エ)＝○　(オ)＝×　(カ)＝○

解説

問2

(1) 空欄(1)を含む一文は、「……母国語の書物はひとつの宝石である。少なくとも私は、食物より日本の書物を恋しく思うようになっていた。」という直前部分を支える。「何百日も故国を離れ、異国をほっつき歩いている者にとって」という前提。「常に満たされることがなかった。」という、空欄(1)直後の表現。この二つに着目すれば、「満たされること」を要請する「欠乏感」みたいなものが想定される。更に、先の「食物より日本の書物を恋しく思うようになっていた。」という箇所で、「日本の書物」が「食物」に比されている点を考えれば、「日本語に飢えている」といった内容が浮かび上がってくるだろう。

(6) 「……日本に帰ることになった。帰った私は再び『さぶ』を手にすることもあったが、あの時のような胸の熱さは二度と覚えることはなかった。」(47〜48行目) この内容のことを、「しかし」(49行目) で比較の対象として、それ以下の叙述が導かれる。『さぶ』は日本では「胸の熱さ」を呼び起こさないが、ある条件のもとでは、間接的にではあるが、それを呼び起こす。そういう趣旨だ。この間接的な「胸の熱さ」が、空欄(6)の箇所と結びつく。ここで、先の条件「あの文庫本の『さぶ』は、いまでもなお、シルクロードをゆっくりと往き来しているのかもしれないのだ。そう思うと、」を考える。『さぶ』は、日本では「胸の熱さ」を呼び起こさないが、シルクロードにおいてこそ「胸の熱さ」を呼び起こす。それはなぜか？ 「遠ざかりつつあり再び戻ることはできないのではないかと怖れていた」(44行目) や「戻れないのではないかと怖れていた」(46〜47行目) などと述べられている不安感が、その背景となっている。こうした不安感が背景となってこその感動。「不安」と「感動」。両者を結び付ける表現を考えよう。

問3

「1 石ころ」は価値のないもの、「2 宝石」は価値があるもの、と、まず選択肢を押さえよう。このことは、**問2**(1)の解説で挙げた「……母国語の書物はひとつの宝石である。少なくとも私は、食物より日本の書物を恋しく思うようになっていた。」からもうかがえる。「宝石」とは、筆者が「恋しく思う」もののことだ。

(2) 直前の「ただの」という語句や、直後の「に化してしまった」という言い回しから、それが価値のないものとわかる。「すでに読み終え」てしまったものは、価値がない。

(3) 「相手の」ものは、筆者にすれば未だ読んではいないもので、価値がある。だから「交換する」わけだ。空欄(2)と交換するの

だから、空欄(2)に入るものとは逆。

(4)(5) 「もちろん、事情は相手にとっても変わらない」に着目する。「私の」あげる「私」にとっての空欄(4)（＝空欄(2)）が「相手」にとっては逆に「相手」の空欄(5)になる、という趣旨。「私」は読んでしまっている書物だから「私」にとっては無価値だが、「相手」はこれからもらって読むのだから、つまりまだ読んでいないのだから、「相手」にとっては価値あるものだ。

問4

A 「そして」は、順接的添加である。空欄A直前で「司馬遼太郎と山本周五郎」を挙げ、直後でその中の「山本周五郎」に話を絞っている。同じ話の流れなので、順接。空欄Aの前が「……こういった。……と。」後が「……ともいった。」だから、添加。「とも」という語に着目しよう。

B 空欄B以下の「『さぶ』の後半部で描かれる、無私のケンシンをつづけるさぶの、栄二へのたった一度のバクハツといったシーン」は、直前の段落末尾の傍線部(a)やこの段落末尾の一文に出てくる「一行目」以外の箇所の例である。「一行目」で胸を熱くすることがいかに異様であることを示すため、「……というなら、自分でも納得できる。……狼狽はしないだろう。ところが、」という形で、比較例として持ち出されている。例を導くための語は、と考えれば「たとえば」しかない。

C 空欄C直前の《　》内の文章は、話が進んでからのものと見えるが、「ここに到っても、」とやっつけて、「まだ一ページが終わるか終わらないかという部分でしかないのだ。」と持ってくる。「ここに到っても、」の「ても」と呼応する、逆接の語を入れる。

D 「しかも」は逆接的添加である。空欄Dの前の文は「喚起力」という「力」の話であり、後の文は「その世界は、……」と主語にあるように、喚起される内容の話である。別の次元のものを結び付ける言葉として、「しかも」が最適。

問5 設問文にある「感動」は、この傍線部(a)の「胸が熱くなってしまった」に該当する。この傍線部(a)は、空欄Bから始まる段落末尾の「駄目になってしまった」の一文と重なり、その二行後の「駄目になった理由がわからなかった。」に続く。これは、「しかし、本当になぜだったのだろう。」（38行目）と受けられて、「いまとなれば、その時の動揺は山本周五郎の文体の力によってもたらされたものに違いない、と考えることができる。」（41～42行目）で締めくくられる。

問6　傍線部(b)は、空欄D直後の「その世界」で受けられ、「遠ざかりつつあり再び戻ることはできないのではないかと怖れていた土地」と説明される。それは更に、後の「戻れないのではないかと怖れていた日本」（46～47行目）へと続く。指示語及び同語類語の繰り返しに着目して辿ろう。

問7

(ア)「日本人だけ」とか、外人はだめ、とかいう話題ではない。

(イ)　筆者がシルクロードにいた、という要素が大事なのであって、『さぶ』の一行目に胸が熱くなるのは普遍的な事実ではない。「孤独を忘れさせてくれる」ということと胸が熱くなることとはちょっと違う。

(ウ)　5～10行の内容に合致する。

(エ)　空欄Dのある、41～45行の内容と合致する。

(オ)　一見11～20行の内容に合致していそう。確かに、日本語への飢餓感とそれに基づく欲求なり価値なりが述べられている。だが、「強く訴えかける力」となると、「喚起力」（43行目）の問題。これは、「文体の力」による。日本語なら何でもよい、というわけではない。選択肢(ウ)とも関わってくるが、だからこそ山本周五郎であり、司馬遼太郎なのだ。

(カ)　(エ)と同じく、41～45行の内容に合致する。

【問題】（自習）

出典…『とはずがたり』／早稲田大学　第二文学部

現代語訳

二十日過ぎのころに江の島というところについた。（その）場所の様子は美しいとも（何とも）、（筆舌につくしがたいほどで）かえって言葉がない。ゆったりとひらけた海の上に離れてある島に、岩屋がいくつもある（ところ）に泊まる。〔中略〕

夜も更けてしまったが、はるばるやってきた旅（であるから）、物思いを重ねる苦むしろ（のような粗末な寝床）は、夢を見るほどもまどろむことができない。人には言わない（つらい物思いに）声を忍んで泣く（涙）も、たもとを濡らしまして、岩屋の外に立ち出て眺めやってみると、雲の波なのか、もやの波なのかも、（あたり一面）見分けられない。夜の雲がすっかり収まりはててしまうと、月も行方を失ってしまったのか、空に澄んだ光で昇ってきて、本当に（都を離れて）二千里の遠くまで尋ねてきてしまった（ような気がすること）だなあ、と（しみじみと）思われるときに、後ろの山であろうか、猿の声が聞こえてくるのも（断腸の故事が思い出されて）腸（はらわた）がちぎれるような（かなしい）思いがして、胸の中のなんとはなしの悲しさも、たった今に始まったように、ついいつまでも思いが続いてしまって、ひとり物思い（に沈み）、ひとりで嘆（いては泣）く涙を乾かすいい機会だろうかと（思って）、都の外まで（はるばる）やってきたのに、この世のつらいことはそっと（私に）付いてきてしまったのだなあと、悲しくて（次のような歌を詠んだ）、

杉の庵……杉の（葉で葺いた）粗末な家には、松の柱と篠簾（がある。そんなところで）つらい世間から遠く離れ（て暮らし）たいものだなあ。

〔中略〕

こうして、荏柄、二階堂、大御堂などという所々を拝みながら、大蔵の谷というところに（行ったが）、（そこで）小町殿と（呼ばれ）て将軍にお仕えしている人は、土御門定実〔＝前大納言・源定実〕の縁者なので、手紙を送っておいたところ、「（御連絡をくださるとは）全く思いがけなくて」と言いながら、「私のところへ（どうぞ）」と（言っ）て（勧めて）くれたのだが、（行くのも）かえってわずらわしく（思っ）て、（その、小町殿のいるところに）近いところに宿をとっておりましたところ、「（この鎌倉には）頼ってゆける人はいないのですか」などと、（私のことを）いろいろと見舞って（お使いを）よこしてくれていたが、（そこまでやってくる間の）道

のりの苦しさもしばらく休めているうちに、善光寺（参り）の道案内にとあてにしていた人が、（陰暦）四月の末のころから重い病気に煩いはじめて、前後不覚になってしまった。たいへん困ったことだ（など）と言ってもいられない（ほど途方に暮れている）うちに、少しはよくなったのだろうかと（先方のことが）思われ（るようになっ）たころに、私のほうが同様に床についてしまった。

（病人が）二人になってしまったので、（周りの）人々も「どうなることなのだろう」と言うが、「特別なことではありません。慣れない旅のつらさで、持病が起こったのです」といって、医師などをお願いしたけれども、今は（これが最期）というくらい（の、ひどい病状）なので、心細さも言いようがない。（昔は）それほどではない病気でさえも、風邪気味で、鼻水が出る程度であっても、少しでも気分が悪くて、二三日も（そのままの状態で）すぎてしまうと、陰陽道や医道は余すところなく（亡くなった父上が配慮してくれて、そのうえ）、家に伝わっている宝や、世間に名声のある名馬まで（総動員して）、霊験あらたかな神社やお寺に奉納する（ものだった）。南嶺の橘や、玄圃の梨（のような高価なものを病気平癒の祈禱のために投げ出しては）、私の（病気の）ためと大騒ぎなさ（るのが、亡くなった父上の常だ）ったものだが、（今はひとりの旅の空で、）病床に伏してから多くの日数が経過したが、神にも祈らないし、仏にも願わないし、何を食べ、何を（薬として）用いたらいいかというような処置もできなくて、ただ床に就いたままで日々を送っていく様子は、（まるで別の人生のように）一生をとりかえたような気がするのだが、（死がいつおとずれるかという）宿命は（人の意思とは無関係に前世から）あらかじめ決まっているものなので（自分では死ぬと思ったにもかかわらずなんとか助かって）、（陰暦）六月のころからは気分もよくなっ（ていっ）たのだが、そうはいってもやはり（遠い善光寺）参詣を決心するほどの（快い）気分にはなれないで、（近くの寺社を）ふらふらと歩きまわって月日を虚しく過ごしているうちに、（陰暦）八月にもなってしまった。

解答

問1　A＝ニ　B＝ホ　C＝ニ　D＝ニ

問2　ロ

問3　(c)・(g)

問4　(3)＝ホ　(4)＝ホ　(5)＝ハ

問5　ロ

問6　みなづき

解説

問1　それぞれの空欄の前後を見きわめて、関連のある内容を選んでいけばいい。

Aについては、直後の「結ぶほどもまどろまれず」に着目すれば、「まどろむ」＝「眠る」ことに関連するものが入ると分かるはず。これでニ・ハに絞れる。あとは「結ぶ」との関連でニを選ぶ。ハだと「枕を結ぶ」ことになってしまい、どうにも不自然である。また、この場面に異性がいたという記述もないのでホの「契り」（＝女と男の関係になること）もおかしい。ロだと「結ぶ」にはつながるが、「まどろむ」ことに直接つながらないのでやはり弱い。イはまったくピント外れ。（ただし「草枕を結ぶ」だと「旅寝」の意味にはなるが、ここはやはり「眠れない」という意味に直結するものが優先される。）

Bについては、「袂を濡らす」や「枕が浮かぶ」が「泣く」ことを意味する慣用句であると覚えておくことだ。直前の「忍びね」は「こっそりと泣くこと」ぐらいの意味である。ハは意味的には近いが、「涙で」ならともかく「涙をうるほす」では不自然。

Cも同様に慣用句的に用いられる表現である。「断腸の思い」という言い方もある。これはもともと漢籍の中の、「子猿を猟師に奪われた母猿がかなしみのあまり死んでしまい、その腹を割いたら腸がバラバラにちぎれていた」という故事をふまえた表現である。文学的には、「猿」は物悲しさを催させる動物なのである。したがって意味に関しては直後に説明されているように「心のうちの物悲しさ」（6行目）である。イでは「死ぬ」ことになってしまう。ロだと逆に喜ばしいことになってしまう。「断食」を意味する記述が問題文中にあるわけではないのでハも不自然。ホでもそれ以前の問題文中に他者との関係に言及されている部分がないのでおかしい。いずれにしても、ニ以外は文脈に合わない。

Dに関しては、直前の「家に伝へたる宝」と「［D］に聞えある名馬」とが対句的に用いられていることに着目すれば容易であろう。「家」と対になり得るのは、「家以外の場」を意味する語である。イ～ハはいずれも個人的なものなので文脈に合わない。ホは近いが、「聞え」はここでは「評判」の意味なので、これでは表現が重複してしまう。

問2　なかなかやっかいな文学史問題だ。早稲田大学志望の諸君は心してかかるように。

傍線部は、『伊勢物語』の中の在原業平の歌「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」をふまえた表現である。『伊勢物語』は十世紀に成立した《歌物語》なので、「同じジャンルに属する作品」はロ。他の選択肢に挙げられている作品の詳細については自分で調べてみること。ジャンルだけを述べておくなら、イは《かな日記》（または《紀行》）、ハは《作り物語》、

ニは《歴史物語》、ホは《軍記物語》、ヘは《紀行》である。

問3　傍線部(2)の「ぬれ」は連用形に接続することから《完了・確述》の助動詞「ぬ」の已然形である。これと同じものを選んでいけばいい。(a)は動詞（下二段活用）「重ぬ」の連体形活用語尾。(b)は直前に動詞（四段活用）「言ふ」の未然形「言は」があるので、《打ち消し》の助動詞「ず」の連体形とわかる。(c)は直後に《詠嘆・伝承過去》の助動詞「けり」がつけられているので、この「に」が連用形であることがわかり、《完了・確述》の助動詞「ぬ」の連用形であるとわかる。「けり」のここでの意味は詠嘆で「来たのだなあ」ぐらいか。(d)は動詞（下二段活用）「尋ぬ」の連用形の活用語尾である。(e)は「にや（あらむ）」の省略形で下に「あり」を伴うことから、《断定》の助動詞「なり」の連用形である（直前は四段動詞連体形）。(f)は(b)と同様、動詞（四段活用）の未然形に接続しているので、《打ち消し》の助動詞「ず」の連体形である。(g)は下二段動詞連用形に接続していて、傍線部(2)と同じ、《完了・確述》の助動詞「ぬ」の已然形である。

問4　(3)については、「なかなか」の語義を捉えるだけで選択肢がイ・ホの二つに絞れる。この二つの吟味に際しては、直前で「わがもとへ」と誘われているのに対して、「近きほどに宿をとりて」いるのだから、その誘いを「わずらわしいもの」に思っていると解する方が自然だろう。なお、イの「気味が悪い」も「むつかし」の語義としてはまちがいではない。

(4)については、前述の「近きほどに宿をとりて」の意味を理解できるか否かがポイントになろう。ここで筆者がなぜ自分自身で宿を取ったのかを考えてみれば、この「小町殿」の誘いがわずらわしかったことに加えて、もうひとつ「他に身を寄せるべき適当なところがなかった」ことが考え得る。だとすればここでの「便り」とは「縁者・後見人」の意味に取るべきであろう。このような多義語に関しては、文脈（前後関係）から選択肢を絞りこんでいくのが鉄則である。なお、イの「手紙」は古文では「ふみ」と表現される。

(5)については、「はかりなきほど」の訳出がポイントとなろう。「ほど」という程度を表す語があるので、程度のニュアンスを含まない選択肢イ・ロ・ホが排除できようが、それだけでは少々根拠が弱い。「はかりなし」は漢字で書けば「測りなし」、つまりは「測定しようがない・はかりしれない」ということになる。ここまでを押さえることで選択肢はハ・ニの二つに絞れる。あとは「あさまし」（予想外である）の意味の取り方であるが、ここではこの前の部分で「大事に病みいだして、前後を知らず」状態になっ

た人が「善光寺の先達に頼みたる人」（案内人としてあてにしていた人）であることに鑑みて、単なる同情のニュアンスのニよりは、自分との関係性を含んでいるハを採る。

問5　傍線部の前後が、挿入的に書かれた回想の部分であることが読み取れないとちょっと苦しい。「さほどなき病にだにも……」（18～19行目）から「……わがためにとのみこそ騒がれし」（20～21行目）までの部分は、病を得て心細くなった筆者が、「昔（＝都で生前の父に守られていた頃）なら、お父さんがいろいろと面倒を見てくれたのになあ……」というモチーフで過去を回想しているのである。

この問題文が、筆者が都を離れてひとり鎌倉にきているシーンであることは、「江の島」という地名（1行目）や、「都のほかまで尋ね来し」（7行目）などの記述でわかる。また、筆者が現在身よりのない状態であることも傍線部(4)などの記述で読みとれる。一方、選択肢群を見ていくと、ロの「亡父」だけが問題文中に直接には登場していない。以上のことから、筆者の「かつて（都に）いた身より」とはこの選択肢ロの「亡父」らしいと推測がつく。また、「家に伝へたる宝」＝家宝を奉納する権限を持っているのは通常はその家の当主だけである。こんなことから、ここの動作主はロとわかる。

あるいは、直後の「わがためにとのみこそ騒がれし」に着目して、筆者が病気になったときに騒いでくれた人、というふうに考えていっても同じ解答に至れよう。

早稲田大学の入試古文（とりわけ文学部）には、このように、人物関係の情報を補う類の注がいっさいないままに人物関係を問うものが時折出される。ある程度の古典常識と、選択肢なども含めた補助的な情報を総動員して立ち向かっていく必要があろう。

問6　**問2**とはうってかわって、こちらは基本的な知識問題。月の異名ぐらいは必須の知識である。できなかった人はこの機会に確認しておくように。なお、「みなずき」では不可。